撮影場所：新潟県新潟市

「天爵」と「人爵」

真価
Vol. 18
SHINKA

「至聖」と呼ばれる孔子に対し「亜聖」と呼ばれる孟子の言葉を記録した「孟子」は、孔子の弟子との問答、あるいは語録を書いた「論語」、そして孔子の弟子である曾子（宗聖）によって書かれた「大学」、そして孔子の孫である子思（述聖）によって書かれた「中庸」とともに中国古典の中核である「四書」の1つとして日本にも多大な影響を及ぼしてきました。

孟子は、孔子の生まれた中国山東省曲阜からあまり遠くない鄒（すう）の地に生まれ、「孟母三遷」の故事で知られる賢母の手で育てられ、孔子の孫である子思の弟子について学んだと言われる人で、孔子（BC551 年～ BC478 年）より百数十年後の BC372 年～ BC289 年に生きた人物です。

時代も孔子の頃と大きく変わり、時まさに戦国時代のまっ只中で各国とも国力の充実に力を入れ、生き残りの競争に鎬（しのぎ）を削っていた時代で、「諸子百家」というさまざまな思想流派が現れ、それぞれに天下統一の方策を提示して活発な論戦を展開していた時代でもありました。

そうした中で、孟子は王道政治の思想を掲げその実現を目指していました。孟子の学説は二本の柱から成り、

第一は、性善説

人間はもともと天から「仁」「義」「礼」「智」など素晴らしい徳性を賦与されて生まれてくる。

しかしこの徳性も放っておくと、もろもろの欲望にくらまされて未開のままに終ってしまう。

徳性を発揮するためには絶えざる修養を必要とする。

これが人間に課せられた課題と言っています。

第二は、王道政治

王道政治とは「仁」と「義」に基づく政治で、人民に対して「徳」をもって臨み、人民の生活が成り立つ事を最優先課題とする政治です。

力づくで相手を押え込む覇道とは反対の政治であります。

しかし当時、各国とも生き残りをはかる為に国力増強に余念がない「覇道」万能の時代の中で、孟子の学説は受け入れられず晩年、郷里にて隠棲し 84 歳で死去したと言われています。

宋代に朱子学が成立してから、それまで並の学説であった「孟子」はその存在感を高め今日に到っています。

その「孟子」の告子篇に

「天爵なるものあり。人爵なるものあり。」

と言う言葉があります。

「天爵」とは、その人が生まれつき身につけている「仁」、「義」、「忠」、「信」などの徳を指しています。

「人爵」とは、公、卿、大夫など高い地位を指しています。

意味は、徳を修める事を目的として修養を積み重ね、結果として高い地位を手に入れるのが本来なのに、高い地位を手に入れる目的の為に、その手段として徳を身につけようとしている事は、目的と手段をはき違えているのではないかと孟子は言いたかったのではないかと思います。

しかし古今東西を問わず、徳を磨く事など初めから無い人々も多いのが現実で、存命中は人爵を得られずも、死後二千数百年後でも後世の人々にその思想上大きな影響を遺している孔子、孟子の様な人と、現世的には功成り名を成しながら死後忘れ去られてゆく多くの現世の成功者と称する人達との比較から、改めて考えさせられるのが、この「天爵」「人爵」という言葉でもあります。

また、「孟子」の滕文公篇では

富貴（ふうき）も淫（いん）する能わず
貧賤（ひんせん）も移（い）する能わず
威武（いぶ）も屈（くつ）する能わず
これこれを大丈夫（だいじょうぶ）と謂う

（富貴にも心を惑わされない、貧苦のなかにあっても節操を変えない。権力を前にしてもたじろがない、こうあってこそ男の中の男だと言える。）

という言葉もあります。

孔孟の時代から二千数百年以上経った今日でも、自国の国益の為に覇道の政治を強行する国や、自社の利益のみを追い求める企業、社会人としての責務を遂行せず、個人の権利を主張し恥を知らない人達が、残念ながら多く有るのが現実です。

我々は改めて孔子、孟子の教えを学び、その様な生き方を心掛けたいものです。

その事が上べだけの景気対策より、根本的な国家再生への道だと思っています。

徳真会グループ
理事長　松村 博史